

作家の肖像

第 22 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1931-2019
勝井三雄

かつい・みつお
1931年東京都生まれ。グラフィックデザイナー。武蔵野美術大学名誉教授。東京教育大学(現・筑波大学)教育学部芸術学科卒業。味の素広告制作室を経て、61年に勝井デザイン事務所を設立。63年、東京オリンピック組織委員会デザイン室に参加。70年、大阪万博でアートディレクターを務める。光村図書高等学校『美術』の編集委員・アートディレクターを務めた。2019年8月、87歳で死去。

クールで熱い人柄

勝井さんとは、ともに光村図書の美術教科書の編集に携わるメンバーとして、お仕事をご一緒する機会に恵まれました。編集会議の席で、洒落た眼鏡をかけた勝井さんが照れるように笑う様子を、今でもよく覚えています。

編集会議の場では、どちらかというと単刀直入に意見を述べる方でした。しかし、それは単なる自己主張ではなく、非常に的確に物事を判断して、淡々とお話しになっていた印象があります。

若々しく、洒落た佇まいはクールに見えましたが、外見に表れないエネルギーや情熱が内側に満ちていたことは、勝井さんの作品からもよくわかります。

「粋」という美意識

2019年の春、宇都宮美術館で開かれた企画展「視覚の共振・勝井三雄」が、生前の勝井さんにとっての最後の個展となりました。開催初日に私も会場に足を運びましたが、まさに圧倒される思いでした。一人のグラフィックデザイナーの生涯をかけた仕事ぶりを一望でき、たいへん心地よい空間でした。

勝井さんは、日本橋の薬卸問屋に生まれたと聞きます。つまり、生粋の江戸っ子なわけですが、勝井さん自身も「粋」という日本特有の精神性を拠り所にしていました。

高校生の頃、哲学者・九鬼周造の著書『「いき」の構造』(※1)を読み、日本特有の美意識にたいそう影響を受けたそうです。日本橋生まれという勝井さん自身の内なるアイデンティ

ティーとも呼応したのでしょう。

私には、正方形の抽斗で敷き詰められた葉巻筒のイメージが、勝井さんの幾何学的なパターンを用いたグラフィックデザインと、どこか重なるようにも思えます。

視覚への探究

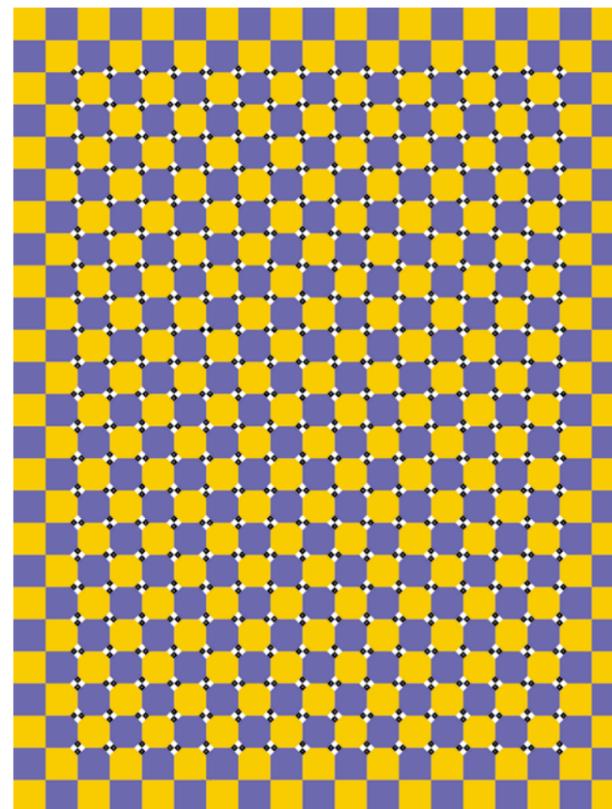
グラフィックデザインの世界はテクノロジーが日進月歩で、日々進化する技術に作家が振り回されてしまうことが少なくありません。しかし、勝井さんの仕事ぶりを見ていると、決して振り回されていないことが伝わります。目まぐるしい変化の中にゆらゆらと身を漂わせながら、新しいデジタル技術やコンピュータに寄り添って仕事をされていたように思います。

勝井さんは五感の一つである「視覚」を追究し、目で見ることのおもしろさ、奥深さの極致を体現した作家です。「錯視狂」という作品がありますが、これは錯視現象という人間の目の不確かさを扱った作品です。カメラと違って、私たちの肉眼は機械ではないので、無意識に対象に修正を加えたり、補正したりする。勝井さんは、そんな人間の目の不確かさを、遊ぶように実験していたのでしょう。生涯を通して、視覚世界への挑戦を続けたグラフィックデザイナーでした。(談)

※1 『「いき」の構造』(1930年・岩波書店)
「いき(粋)」という日本独自の美意識の構造について考察した哲学者・九鬼周造の著書。

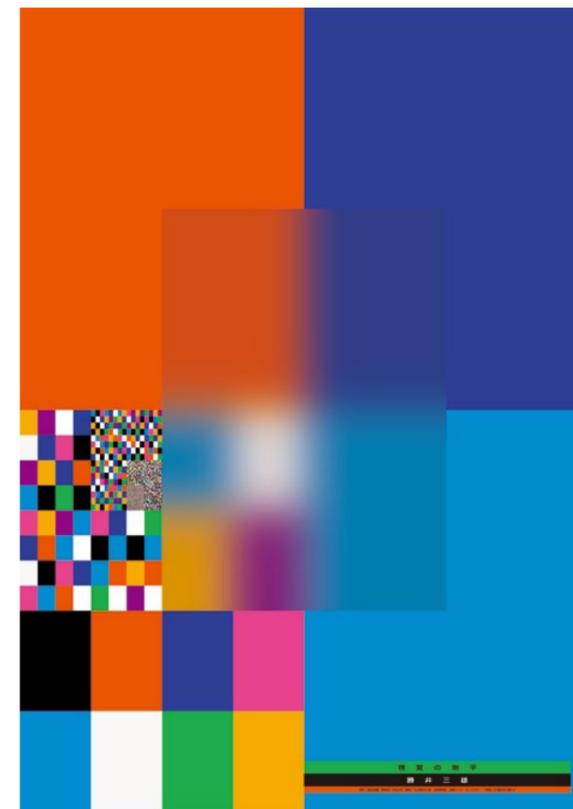
酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



「錯視狂 FONT-F」ポスター

2001年
視覚心理学を研究している北岡明佳博士(立命館大学)のパターンを用い、錯視現象の中から文字を浮かせに挑んだ作品。



「作品集「視覚の地平 visionary∞scape」ポスター」

2004年
モニター上の色も、距離を近づけたり、スケールを大きくしたりすれば、微細なピクセルの集合体であるという、視覚の仕組みとデジタル技術の交錯を表現した作品。
第7回亀倉雄策賞受賞作。



「「スペイン偉大なる午後」奈良原一高写真集」

1969年 求龍堂
生前に親交の深かった写真家・奈良原一高の
写真集のデザインを手がけた。
写真展として発表された内容を、本の形に再構成している。